

中学生の非行傾向行為の実態と変化：1学期と2学期の比較

小保方 晶子* 無藤 隆**

中学生の非行傾向行為の実態と変化を明らかにするために、1学期に2397名、2学期に2347名に質問紙調査を行い、非行傾向行為について性別、学年、学期による検討を行った。その結果、次のことが明らかになった。非行傾向行為の特徴として、「病気などの理由がないのに学校をさぼる」行為は女子に多いこと、非行傾向行為は、1年生より2年生の方が、多く増加していること、1学期より2学期の方が増加しており、学年だけでなく夏休みを挟んだ学期によって変化していることが明らかになった。夏休みが変化の機会になっており、中学生の非行傾向行為は夏休みの過ごし方などが大きく影響していることが示唆された。全体的な傾向としては、2年生の2学期が最も増加し、その後3年生になると減少するという変化が明らかになった。3年生では受験があることによって減少していることが示唆された。

問題と目的

中学校でみられる不適応行動の1つに非行がある。タバコを吸うなどの行為は、中学校で特に問題となっているものであり、また、非行総数中の6割から7割以上といった圧倒的多数が、万引きや自転車盗といった軽微な犯罪を中心に遊び感覚でなされるといわれる「初発型非行」である。

非行は深化していく(緑川、1999)との指摘もあり、中学校生活の中でみられる行為を対象とし検討することで、非行が深化するのを抑止する手がかりが明らかになり非行の芽を摘むことにつながると考えられる。本研究では学校に通っている中学生を対象とし、中学校生活の中でみられる行為に焦点をあてることから、タバコを吸うなどの行為を非行傾向行為と名づけ検討する。

少年非行に関する研究として、少年院や鑑別所に送致された「非行少年」に焦点を当てた研究や、それらの少年と一般少年の比較をした研究(例えば、総務庁青少年対策本部、1999)が多くある。しかし、非行傾向行為は、中学校で見受けられるものであるから、少年院へ送致された子どもと、一直線に結びつけて考えることはできないと考えられる。

問題行動、不良行為、非行を含めて、子どもの逸脱行為が何歳くらいから現われ、年齢とともにどのよう

な推移をたどるものなのか。新田(1990)は、各種統計をまとめた結果から、10歳を過ぎ小学校高学年になると、ほとんどの種類の行為が発生頻度は別として勢ぞろいし、中学生段階で各種の行為が最も頻発しているとしている。そして、思春期を過ぎてやがて高校を卒業する頃になると、大部分の行為の発生率は低下していると指摘している。

平成14年度の刑法犯少年を年齢別にみると、16歳が最も多く、次に15歳、14歳の順となっており、14歳から16歳までの低年齢層で刑法犯少年全体の64.6%を占めている。つまり、非行の好発時期は、14歳から16歳であり、中学生の段階でもその数が多いことがわかる。また、その特徴について、Coleman & Hendry(1999)は、イギリスの統計調査をもとに、男子は18歳がピークであり、女子は15歳であり、年齢差があり、年齢分布が男女で同じでないことを指摘している。

以上のように、非行行動は、年齢による変化がみられる。しかし、統計調査の数値でみられる子どもたちの変化は、刑法上何らかの形で有罪とされたり、補導されたりした子どもたちの推移である。では、中学校で見られる非行傾向行為は、実際どのような変化をしているのだろうか。本研究では、中学校生活の中でみられる非行傾向行為の実態と変化を明らかにすることを目的とする。

中学生は、青年期にあたる時期である。青年期は、親離れをし友人の影響が大きくなり、親子関係、友人

キーワード：非行傾向行為、中学生、学期、実態、変化

* お茶の水女子大学人間文化研究科

** お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター

関係で変化が起きる。友人は、アドバイス、サポート、フィードバックの提供者、行動のモデル、個人の特質やスキルの比較をするための情報源として、より重要なものとなる (Coleman & Hendry, 1999)。さらに、青年期の友人関係は、時間を一緒に過ごす中で、時間とともに行動が似てくることをお互いに強化している (Kandel, 1986)。

多くの研究で、非行に関連する要因として逸脱した友人の存在が指摘されている (Brendgen, Vitaro, & Bukowski, 2000; Galambos, Barker, & Almedia, 2003; 鈴木・鈴木・原田・井口, 1996; 総務庁青少年対策本部, 1999)。非行と逸脱した友人の発達の变化を調査した研究では、青年期中期にかけて徐々に逸脱した友人と関わるが増え、それにつれて非行行動に関わる事が増加し、その後成人期前期にかけて逸脱した友人と関わる事が減少し、それにつれて非行行動が減少することが明らかにされている (Elliot & Menard, 1996)。

また、友人関係が非行に与える影響では、特に同調的な関係が指摘されており (松元, 1990)、友人と一緒にでありたいと思いに基く関係が非行と関連していると考えられる。中学生で多くみられる友人関係は同調的な関係である (落合・佐藤, 1996) ことから中学生の友人関係の持ち方と非行が関連していることが示唆される。

中学生になると、休日を過ごす相手も、家族から友だちに変化し (内閣府, 2001) 友人と過ごす時間が増加する。友人の影響を考えた時、中学生の場合、自由に行動ができ友だちと過ごす時間が増加する夏休みが、変化に重要な時期として考えられる。また、中学校への移行に伴う大きな変化として、部活動がある。小学校までは、夏休みを家庭で過ごしていたと考えられるが、中学生では部活動の活動時間を含め、多くの時間を友達とともに過ごすことになる。

次に、非行は将来について考えたときには、リスクを伴う行為である。現在では、中学生の多くの子どもが学習塾に通っており (厚生労働省, 2001)、受験を意識させられる環境にある。受験があることによって、多くの子どもたちが、一時的な不適応として非行傾向行為をやめてしまうと考えられる。特に、中学校3年生になると、部活を引退し、夏期講習に通う子どもが増えるなど夏休みの過ごし方が変化する。夏休みは中学校3年生にとっても、変化に重要な時期になるといえるであろう。

中学校でみられる非行傾向行為の変化には、夏休み

や、受験などが影響を与えていると考えられる。よって、中学生の非行傾向行為の変化を検討するためには、夏休みの前後で変化をみる必要がある。そこで、本研究では、中学生でみられる非行傾向行為の実態と変化を明らかにするために、学年による比較を含め、1学期と、2学期の比較を行う。その際、中学生の行動に影響を与えていると考えられる部活動への参加、進学への意識、友人関係についても検討する。

方法

調査対象 東京都内の公立中学校3校の1～3年生を調査対象とした。分析対象は全調査対象のうち無回答の項目が質問項目の3分の1以上あるものや、回答内容に不備のあったものなどを除いたデータである。1学期が2397名 (1年生男子362名、女子407名、性別不明5名、2年生男子399名、女子399名、3年生男子407名、女子412名)、2学期が2347名 (1年生男子363名、女子395名、性別不明2名、2年生男子388名、女子393名、性別不明2名、3年生男子385名、女子396名、性別不明3名) である。

調査手続き 2003年7月と12月に質問紙調査を行った。質問紙、実施方法の説明を学校に郵送し、担任教師によるクラスごとの実施を依頼した。回答内容の秘密を保持するために調査票とともに封筒を配布した。対象者は調査票を記入した後、各自で調査票を封筒に入れ、厳封した上で提出した。なお、回収率は1学期が91%、2学期が90%であった。

調査内容

(1)部活動への参加

「あなたは放課後の部活に入っていますか」との教示で、「運動部」、「文化部」、「その他の部活」、「入っていない」から当てはまるもの全てを尋ねた。

(2)進学への意識 (進学希望)

「将来どの学校まで進みたいですか」との教示で、「中学校まで」、「高校まで」、「短期大学・専門学校まで」、「大学・大学院まで」から、当てはまるもの1つを尋ねた。

(3)非行傾向行為の経験

非行傾向行為の項目内容は、奏 (2000) の調査で、中学生の経験率で10%程度以上みられるものを参考に作成した。「タバコをすう」、「病気などの理由がないのに学校をさぼる」、「親にかくれて酒やビールを飲

む]、「子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ」、「店の品物をお金を払わずにもってくる」、「よその人の自転車を盗んだり、かってに使ったりする」の各項目について、「あなたは、次のことをしたことがありますか。」という教示で、「ない」、「ある」の2件法で回答を求め、学年差を検討する際には、この1年間での経験者に絞って分析を行う必要があることから、経験が「ある」と回答した子どもに「あなたはこの1年間で次のことをしたことがありますか」との教示で、各項目についてその有無を尋ねた。

(4) 親しい友人

① 友人の人数

「現在つきあっている親しい友だちは何人くらいいますか」との教示で、「いない」、「1人」、「2～3人」、「3～5人」、「5～9人」、「10～14人」、「15人以上」から、当てはまるもの1つを尋ねた。

② 友人の種類

1) 「現在つきあっている親しい友だちに次の人はいますか」との教示で、「同じ学年・年齢の人」、「年上の人」、「年下の人」、「異性の人」から当てはまるものを全てを尋ねた。

2) 「その友だちは主にどういう人ですか」との教示で、「中学校の友だち」、「小学校が同じで現在違う中学校に通う友だち」、「塾や習い事の友だち」、「街で知りあった友だち」、「その他の友だち」から当てはまるものを全てを尋ねた。

なお、統計ソフトはSPSS11.5Jを使用した。

結果

(1) 部活動への参加

部活動への参加(種類)について、結果をTable 1に示す。

多くの子どもが、部活動に入っていることが示された。部活動に入っていない人数に注目すると、学年が上がるにつれ、入っていない子どもが増加している。また、1学期より2学期の方が入っていない子どもが増加している。部活動への参加率は、学年だけでなく、学期によって変化している。

(2) 進学希望

「将来どこの学校まで進みたいか」の結果をTable 2に示す。

1学期及び、2学期の結果から、ほとんどの子どもが高校進学以上を希望していることがわかる。男女別

Table 1 部活動の参加(性別、学年別)

1学期	1年		2年		3年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
運動部	N 317	241	328	233	282	178
	% 87.6	59.4	82.6	58.5	70.0	43.5
文化部	N 21	136	39	129	43	169
	% 5.8	33.5	9.8	32.5	10.7	41.3
その他の部活	N 12	13	5	4	7	0
	% 3.3	3.2	1.3	1.0	1.7	0.0
入っていない	N 13	18	27	33	72	60
	% 3.6	4.4	6.8	8.3	17.9	14.7
2学期	1年		2年		3年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
運動部	N 305	213	311	209	237	150
	% 84.7	54.3	78.3	53.5	62.2	39.3
文化部	N 28	143	38	126	34	140
	% 7.8	36.5	9.6	32.2	8.9	36.6
その他の部活	N 11	8	5	3	4	2
	% 3.1	2.0	1.3	0.8	1.0	0.5
入っていない	N 20	34	43	52	110	96
	% 5.6	8.7	10.8	13.3	28.9	25.1

Table 2 「将来どの学校まで進みたいか」(性別、学年別)

1学期	1年		2年		3年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
中学校まで	N 11	5	7	7	6	5
	% 3.1	1.3	1.8	1.8	1.5	1.2
高校まで	N 171	144	139	139	130	116
	% 48.3	36.1	35.2	35.2	32.5	23.9
短期大学・ 専門学校まで	N 42	154	42	129	51	136
	% 11.8	38.6	10.6	32.7	12.8	33.8
大学・大学院 まで	N 131	96	207	120	213	145
	% 36.9	24.1	52.4	30.4	53.3	36.1
2学期	1年		2年		3年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
中学校まで	N 8	4	5	2	4	3
	% 2.2	1.0	1.3	0.5	1.0	0.8
高校まで	N 154	158	134	132	110	81
	% 42.9	40.6	33.9	34.1	28.8	20.7
短期大学・ 専門学校まで	N 36	136	53	130	60	141
	% 10.0	35.0	13.4	33.6	15.7	36.1
大学・大学院 まで	N 161	91	203	123	208	166
	% 44.8	23.4	51.4	31.8	54.5	42.5

では、「短期大学・専門学校まで」と答える子どもが女子に多く、「大学・大学院まで」と答える子どもは男子に多い。学年による比較では、学年が上がるにつれて、「高校まで」と答える人数が減少し、それ以上を希望する子どもが増加していることがわかる。

学期による比較では、特に3年生で変化している。男子では、1学期より2学期で「高校進学まで」と答

Table 3 非行傾向行為の経験の「有り」の人数と％（性別、学年別）

1 学期		1 年		2 年		3 年	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子
タバコをすう	度数	16	21	18	19	20	21
	％	4.5	5.2	4.5	4.8	5.0	5.2
病気などの理由がないのに学校や仕事をさぼる	度数	25	30	30	54	29	38
	％	7.0	7.4	7.6	13.6	7.2	9.4
親にかくれて酒やビールを飲む	度数	15	19	18	33	16	28
	％	4.2	4.8	4.6	8.4	4.0	6.9
子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ	度数	65	49	60	70	69	59
	％	18.2	12.1	15.3	17.6	17.2	14.6
店の品物をお金を払わずにもってくる	度数	12	4	21	18	15	11
	％	3.4	1.0	5.3	4.5	3.7	2.7
よその人の自転車を盗んだり、かってに使ったりする	度数	17	9	21	17	14	17
	％	4.8	2.2	5.3	4.3	3.5	4.2
2 学期		1 年		2 年		3 年	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子
タバコをすう	度数	20	19	27	29	27	25
	％	5.6	4.9	6.9	7.4	7.0	6.3
病気などの理由がないのに学校や仕事をさぼる	度数	22	46	39	59	30	37
	％	6.1	11.8	9.9	15.1	7.8	9.3
親にかくれて酒やビールを飲む	度数	13	22	32	45	32	34
	％	3.6	5.7	8.1	11.5	8.3	8.6
子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ	度数	55	61	71	97	79	48
	％	15.3	15.7	18.0	24.7	20.5	12.1
店の品物をお金を払わずにもってくる	度数	16	8	22	25	18	16
	％	4.4	2.1	5.6	6.4	4.7	4.0
よその人の自転車を盗んだり、かってに使ったりする	度数	23	6	27	25	15	12
	％	6.4	1.5	6.8	6.4	3.9	3.0

える人が32.5%から28.8%に減少し、「短大・専門学校まで」と「大学・大学院まで」を希望する子どもが増加している。女子では、3年生の2学期で「大学・大学院まで」と答える子どもが36.1%から42.5%へと顕著に増加している。3年生の夏休み以降、進路の希望が高くなる子どもが増加しており進学をかなり意識するようになっている。進学に対する意識も夏休み前後で変化しているといえる。

(3)非行傾向行為の経験者：1学期と2学期の比較

非行傾向行為のこの1年間の経験について「ある」と答えた者の人数と割合を、Table 3に示す。

非行傾向行為の学期による特徴を明らかにするために、それぞれの学期の非行傾向行為について、性別×学年の2元配置の分散分析を行った。

①1学期の分析結果

性別による主効果がみられたのは、次の2つの項目であった。「病気などの理由がないのに学校をさぼる」(F(6,2322)=5.488, p<.05)、「親にかくれて酒やビールを飲む」(F(6,2322)=6.735, p<.05)は、女子に多いことが示された。

学年による主効果がみられたのは、次の2項目であった。「病気などの理由がないのに学校をさぼる」(F

(6,2322)=3.595, p<.05)、「店の品物をお金を払わずに持ってくる」(F(6,2322)=5.194, p<.01)は、それぞれ、1年生より2年生の方が多いことが示された。1年生と比較し、2年生では「この1年間の経験」が増加していることが読み取れる。

②2学期の分析結果

性別による主効果がみられたのは、次の2項目であった。「病気などの理由がないのに学校をさぼる」は女子に多いことが示された(F(6,2316)=11.023, p<.001)。また、「よその人の自転車を盗んだり、かってに使ったりする」は男子に多い(F(6,2316)=5.166, p<.05)ことが示された。

学年による主効果がみられたのは、次の項目であった。「病気などの理由がないのに学校をさぼる」は、2年生が、1年生、3年生より多いことが示された(F(6,2316)=4.010, p<.05)。「親にかくれて酒やビールを飲む」は、1年生より、2年生、3年生の方が多いうことが示された(F(6,2316)=7.754, p<.001)。「店の品物をお金を払わずにもってくる」は、1年生より2年生の方が多いうことが示された(F(6,2316)=5.468, p<.01)。「よその人の自転車を盗んだり、かってに使ったりする」は、3年生より、2年生の方が多いうことが示された(F(6,2316)=4.687, p<.01)。

「子どもだけで夜遅くまで遊ぶ」は、性別×学年による交互作用がみられた ($F(6, 2316) = 7.805, p < .001$)。交互作用がみられたため、性別に学年による一元配置の分散分析を行ったところ、男子では有意な差はみられなかった ($F(3, 1138) = 1.732, n.s.$)。女子では、有意な差がみられ、2年生が1年生、3年生より多い ($F(3, 1179) = 11.739, p < .001$) が示された。

③ 1学期と2学期の比較分析

次に、1学期と2学期の違いをみるために、非行傾向行為の6項目の「この1年間の経験」について、学期によるt検定を行った。

全ての項目で、1学期より2学期の方が、この1年間の経験が増加している事が示された。

有意な差がみられた項目は、「タバコを吸う」 ($t(4706) = -.2356, p < .05$)、と、「親にかくれて酒やビールを飲む」 ($t(4697) = -.3077, p < .01$)、「店の品物をお金を払わずもってくる」 ($t(4703) = -1.976, p < .05$)、であった。「子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ」は、1%水準で有意傾向がみられた ($t(4699) = -1.789, p < 0.1$)。

中学生の非行傾向行為の全体的な変化として、1学期より、2学期の方が、非行傾向行為が増加することが明らかになった。夏休み及び2学期が、非行傾向行為の増加の機会になっているといえる。

(4) 友人関係の分析 (1学期と2学期の比較を含む)

非行傾向行為の経験の有無による比較を行うために、合成変数を作成した。非行傾向行為は、「ない」、「ある」の0、1のカテゴリカルデータであるため等質性分析を行った。カテゴリ数量化の値が第1次元で、「ない」が、.138～.259であり、「ある」が-.259～-.13であったので、それぞれのカテゴリで等質性が確認された。よって、本尺度は1因子構造であると見なした。信頼性係数を算出した所、 $\alpha = .64$ であった。非行傾向行為の経験の有無を分類するために、非行傾向行為について、この1年間で全く経験なしの子どもを「非行傾向行為経験なし群」、1つ以上経験ある子どもを「非行傾向行為経験あり群」に分けた。そして、友人の数、友人の種類について、非行傾向行為の経験の有無で分析を行った。

① 友人の数 (1学期の分析結果より)

非行傾向行為のあり群と、非行傾向経験なし群で違いはみられなかった。一般少年と補導少年の比較をした調査では、親しい友人の数では、補導群は一般群よ

Table 4 現在つきあっている親しい友だちの数と非行傾向行為の経験の有無

		無し	有り
いない	N	11	6
	%	0.7	0.9
1人	N	13	8
	%	0.8	1.2
2～3人	N	61	30
	%	3.7	4.3
3～5人	N	172	79
	%	10.5	11.4
6～9人	N	319	127
	%	19.4	18.4
10～14人	N	259	85
	%	15.8	12.3
15人以上	N	808	356
	%	49.2	51.5

り親密な関係にある他者が少ない (内閣府、2001) ことが明らかにされているが、中学校でみられる非行傾向行為の経験の有無では、違いはみられなかった。

② 友人の種類

友人の種類それぞれの項目について、非行傾向行為の経験の有無で比較した。

「年上の人」、「異性の人」が、非行傾向行為の経験のある子どもの方が多いたことが示された。また、「街で出会った人」、「その他の友だち」が非行傾向行為の経験のある子どもの方が多いたことが示された。

一般少年が学校の友だちを中心として同年齢の友人と交わる傾向がみられるのに対して、非行少年は「街で知り合った友達」を含む異なる年齢層の友人とも交流する傾向がみられる (青少年対策本部、1999) との結果と一致する。

1学期と2学期を比較したところ、非行傾向行為の経験のある子どもは、2学期では特に「街で出会った友人」が増加していることが示された。非行傾向行為の経験のない子どもたちは、夏休みの前後で変化はみられなかった。

考 察

中学生の非行傾向行為の実態と変化を明らかにするために、非行傾向行為について性別、学年、学期による差がみられるかどうかを検討した。

非行傾向行為の特徴として、「病気などの理由がないのに学校をさぼる」行為は、女子に多い行為であることが示された。

学年による特徴としては、非行傾向行為は、1年生より2年生の方が増加していることが示された。特に

Table 5 ①友人の種類と非行傾向行為の有無

		1学期		2学期	
		無し	有り	無し	有り
同じ学年	N	1625	681	1669	625
	%	99.2	99.1	99.3	98.6
年上の人	N	539	287	597	279
	%	32.9	41.8	35.6	44.0
年下の人	N	515	224	537	211
	%	31.4	32.6	32.0	33.3
異性の人	N	362	229	387	224
	%	22.1	33.3	23.1	35.3

Table 6 ②友人の種類と非行傾向行為の有無

		1学期		2学期	
		無し	有り	無し	有り
中学校の友だち	N	1593	663	1645	613
	%	97.2	96.4	98.0	96.5
小学校が同じで現在違う中学校に通う友だち	N	735	328	770	313
	%	44.8	47.7	45.9	49.3
塾や習い事の友だち	N	503	186	590	198
	%	30.7	27.0	35.2	31.2
街で知りあった友だち	N	62	53	66	76
	%	3.8	7.7	3.9	12.0
その他の友だち	N	192	116	180	102
	%	11.7	16.9	10.7	16.1

2学期で、1年生より2年生の方が増加している項目が多くなっており、2学期の方が1学期より顕著な差がみられることが明らかになった。さらに、2学期では3年生の方が、2年生より有意に減少している項目がみられた。

非行行動は、年齢が上がるにつれ増加し（法務省、2002）、また非行傾向行為は、学年が上がるにつれその経験者は増加する（小保方、2002）が、この1年間の経験者に絞ってしてみると、3年生では減少することが示された。また、それは、2学期で特に顕著な特徴であることが示された。

3年生では、夏休みの前後で、進学に対する意識も変化しており、このような変化は受験があることが影響を及ぼしていると考えられる。学年が上がるにつれ学習塾に通う子どもが増加し（厚生労働省、2001）、塾へ通う理由も、中学校2年生までが「行かないと勉強ができなくなる」が最も多いのに対し、中学3年生では「希望する学校へ行きたいから」が最も高くなる（厚生労働省、2001）ことから、中学校3年生になると、受験をかなり意識するようになることがわかる。非行は、受験を考えたときには、リスクを伴うものになる。中学校でみられる非行傾向行為は、受験が抑止として働いているのではないだろうか。

学期による特徴としては、1学期より2学期の方が、非行傾向行為が増加していることが示された。夏休み

や2学期が非行傾向行為の増加の機会になっていることが伺える。特に、2年生の2学期が最も非行傾向行為が増加していることから、2年生で最もその傾向が強く、夏休み前後での変化が最もみられる学年であるといえるであろう。

友人関係については、非行傾向行為をしている子どもでは、夏休み後の2学期に、「街で出会った友人」が増加しており、夏休みの過ごし方や、友人との出会いが非行傾向行為の経験と関連しているといえる。

中学生の非行傾向行為は、学年だけでなく夏休みを挟んだ1学期と2学期で変化がみられることが明らかになり、夏休みの過ごし方などが大きく影響していることが示唆された。

また、中学校3年生では、非行傾向行為の「この1年間の経験」は減少していることも明らかになり、統計上でみられる非行行動は、年齢が上がるにつれ増加しているが、それとは異なる変化が中学生の非行傾向行為ではみられることが明らかになった。

まとめ

- ①「病気などの理由がないのに学校をさぼる」行為は女子に多い。
- ②非行傾向行為は、1年生より、2年生の方が増加する。
- ③非行傾向行為は、1学期より2学期の方が増加している。
- ④全体的な傾向として、2年生の2学期が最も増加し、その後3年生になると減少する。
- ⑤2学期の調査で非行傾向行為の経験のある子どもたちは、「街で出会った友人」が増加している。

文献

- Brendgen, M., Vitaro, F., & Bukowski, W. M. (2000). Deviant friends and early adolescents's emotional and behavioral adjustment. *Journal of Research on Adolescence, 10*, 173-189.
- Galambos, N. L., Barker, E. T., & Almedia, D. M. (2003). Parents Do Matter: Trajectories of Change in Externalizing and Internalizing Problems in Early Adolescence. *Child Development, 74*, 579-598.
- Coleman, J., & Hendry, L. B. (1999). *The Nature of Adolescence*. (3th ed). Routledge.

- Elliott, D. S., & Menard, S. (1996). Delinquent Friends and Delinquent Behavior: Temporal and Developmental Patterns. In David Hawkins (Ed.), *Delinquency and Crime: Current Theories*. (pp.28-67). Cambridge: Cambridge University Press.
- 秦政春. (2000). 子どもたちの規範意識と非行・問題行動. *大阪大学大学院人間科学研究科人間科学研究科紀要*. 26, 123-155.
- 法務省. (2002). 犯罪白書. 大蔵省印刷局.
- Kandel, D. B. (1986). Processes of peer influence. In Silbereisen, R. K., Eyferth, K., & Rudinger, G. (Eds.), *Development as action in context: Problem behavior and normal youth development*. (pp. 203-227). New York: Springer-Verlag.
- 厚生労働省. (2001). 平成13年度児童環境調査結果の概要.
- 松元泰儀. (1996). 人間関係のつまずきと病理. 齋藤誠一. (編). *人間関係の発達心理学 4 青年期の人間関係*, (pp.135-167). 培風館.
- 緑川徹. (1999). 初発型非行—豊かさが生みだす浮遊非行—. 清水賢二. (編). *少年非行の世界*. (pp. 36-65). 有斐閣.
- 内閣府. (2001). 第2回青少年の生活と意識に関する基本調査.
- 内閣府. (2001). 青少年の社会的適応能力と非行に関する研究調査報告書.
- 小保方晶子. (2003). 中学生の非行傾向行為の抑止要因について—家族関係・友人関係・セルフコントロールからの検討—. お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修士論文.
- 落合良行・佐藤有耕. (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化. *教育心理学研究*, 44, 55-65.
- 新田健. (1990). 子どもの非行と感情教育. *児童心理*. 8, 1-10. 金子書房.
- 総務庁青少年対策本部. (1999). 非行原因に関する総合的研究調査 (第3回). 大蔵省印刷局.
- 鈴木護・鈴木真吾・原田豊・井口由実子. (1996). 自己申告法における中学・高校生の逸脱行為の広がりとその背景要因に関する研究2. 経験された逸脱行為のレベルと社会・心理的要因との関連. *科学警察研究所報告防犯社会編*. 37, 28-39.